

令和二年度

# 適性検査 I

9 : 00

（

9 : 45

## 〔注意〕

- 1 この問題冊子は一ページから二十二ページにわたって印刷してあります。
- 2 ページの抜け、白紙、印刷の重なりや不鮮明な部分などがないかを確認してください。  
あつた場合は手をあげて監督の先生の指示にしたがつてください。
- 3 解答用紙は二枚あります。受検番号と氏名をそれぞれの決められた場所に記入してください。
- 4 声を出して読んでいいません。
- 5 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙を一枚とも提出してください。
- 6 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙を一枚とも提出してください。
- 7 文字ははつきりと書き、答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書いてください。
- 8 文章で答えるときは、漢字を適切に使い、丁寧に書いてください。

横浜市立

南

高等学校附属中学校

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校

みなみさんとりかさんが社会科資料室で地球儀や世界地図を見ながら話をしています。次の【会話文】を読んで、あとの問題に答えなさい。

### 【会話文】

りかさん 球体の地球を、平面の世界地図で正確に表すことはできるのでしょうか。

みなみさん 球体の地球を平面の世界地図で表すと、必ず正確ではないところができてしまします。

りかさん どのようなどころが正確ではなくなるのですか。

みなみさん 【資料1】の地図を見てください。【資料1】の地図では、方位は正確に表されていません。

りかさん 方位ですか。【資料1】の地図では、東京から見て真東と考えられる方向には、アメリカ合衆国がつしゅうこくがあり

ますね。

みなみさん はい。しかし、実際は、東京から見て真東の方向には、アルゼンチンがあります。

りかさん そうなのです。どのようにして調べるのですか。

みなみさん

【資料2】のように、地球儀上の東京を通るよう南北にまっすぐひもをはります。その南北にはつた

ひもの東京の位置に、そのひもに対して90度になるように東西にまっすぐひもをはります。そうする

と東京から見た東西南北の方向が分かれます。

りかさん その方法で調べると、東京から見て、実際に真西にある国は、（あ）だということが分かりますね。

【資料1】の地図で見るとどついぶんちがいます。つまり【資料1】の地図の方位は正確ではないということですね。

みなみさん そうです。このように、球体である地球を平面の世界地図に正確に表すことはできません。

りかさん 世界地図は面積より、方位などの全てを、同時に正確に表すことができないということですね。

みなみさん では【資料3】の地図を見てください。【資料3】は面積を正確に表している地図です。

りかさん これを見ると、【資料1】の地図とはちがった印象を受けますね。

みなみさん そうですね。【資料3】の地図を見ると、いろいろな国の大さしが比べられますね。では、日本と同じくらいの面積の国はどのような国があるか、統計資料で調べてみましょう。

りかさん 日本と同じくらいの面積の国には、ドイツがあります。日本とドイツを比べた【資料4】もありました。

みなみさん 【資料4】からはどうなことが分かりますか。

りかさん ドイツと日本を比べると（い）ことが分かります。

みなみさん そうですね。統計資料からもいろいろなことが分かりますね。

りかさん 【資料5】の地図を見てください。これは、わたしがドイツへ旅行した時に、よく目にしたものです。

みなみさん ヨーロッパが中心になつていてる地図ですか。

りかさん そうです。【資料1】のような日本でよく見る地図とはちがいますね。

みなみさん はい。【資料5】の地図では、日本が東のはしにあるように感じます。

りかさん ヨーロッパではこのような地図が広く使われているそうです。

みなみさん それは知りませんでした。中心が変わると、印象がちがいますね。

りかさん もう一つ、【資料6】のように南北が逆転している地図も見つけました。

みなみさん すごいですね。南北が逆転すると、世界が別のものに見えますね。

りかさん みなみさん、【資料7】の地図は、【資料1】の地図の中のある地域ちいきを、別の向きから見た地図ちずです。

みなみさん これは【資料1】の地図の（う）の地域を、別の向きから見た地図ですか。

りかさん そうです。こう見ると、（え）が瀬戸内海せとうないかいのようないかいに見えてきませんか。

みなみさん 本当ですね。見る向きを変えると、印象が変わりますね。

みなみさん りかさん、わたしは、地図ちずがえがかけられた旗を見つけました。

りかさん それはどのよだな旗ですか。

みなみさん 【資料8】の旗です。（お）が旗の真ん中にあり、その両わきにオリーブの葉はがえがかれています。

りかさん めずらしい旗ですね。このオリーブの葉にはどのような意味があるのですか。

みなみさん これは地図ちずと合わせて、世界の平和を表しているそうです。

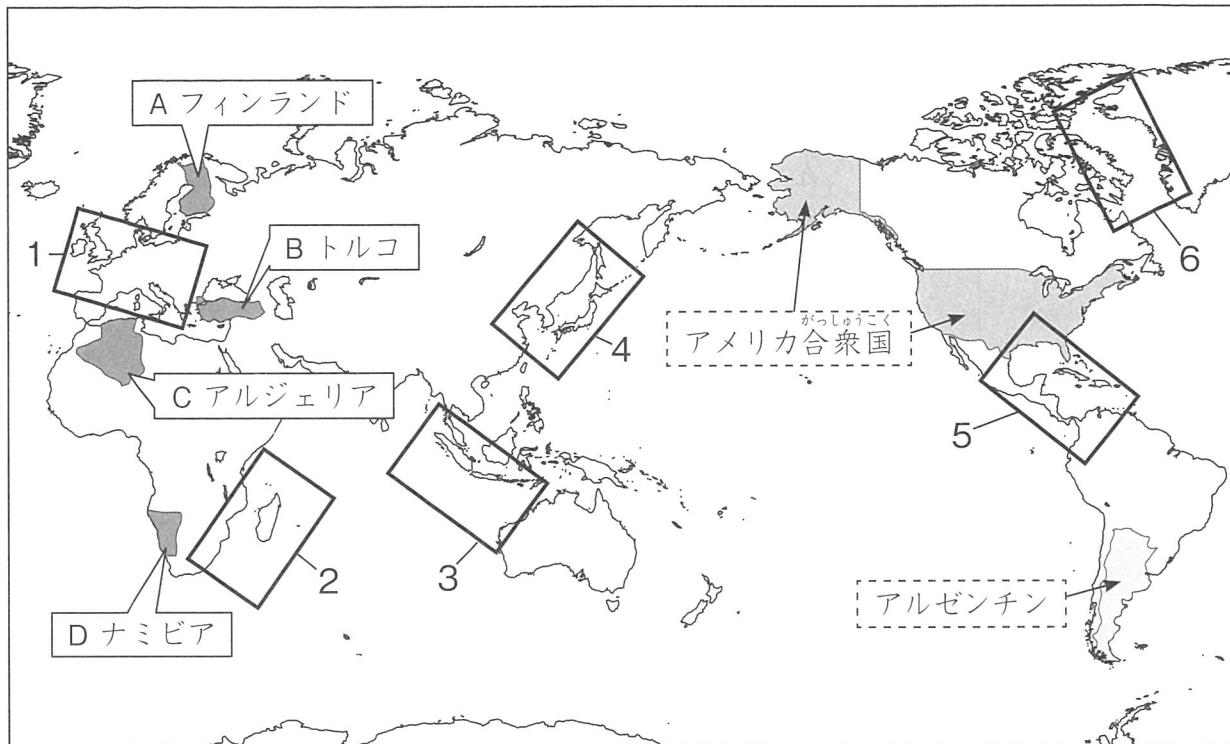
りかさん いろいろな地図や資料から多くのことが分かりましたね。

みなみさん はい。今日は新しい発見が多くてきて、楽しかったです。

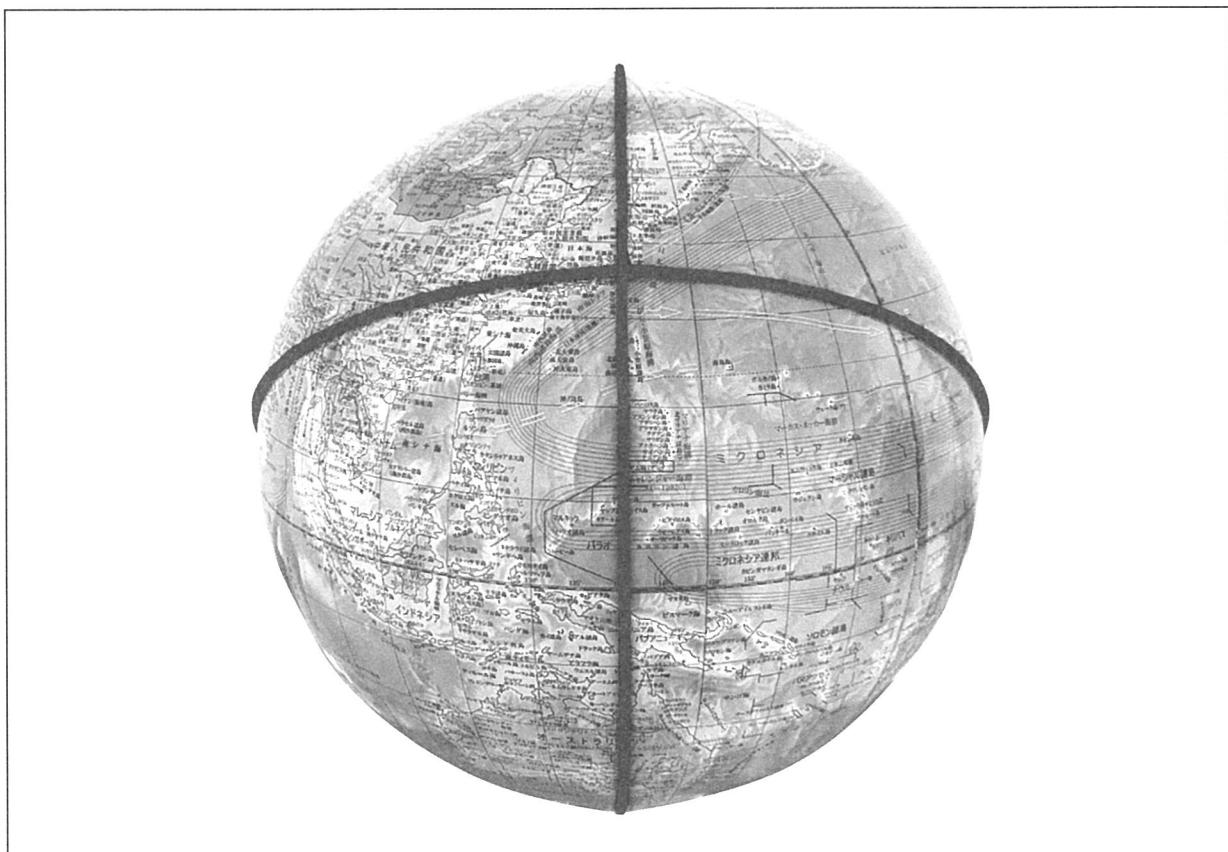
りかさん また、地図ちずで見るだけではなく、実際に現地に行つて調べるのもいいかもしませんね。

みなみさん そうですね。どんどん新しい知識ちじを開拓かい拓したいと思います。いつしょにがんばりましょう。

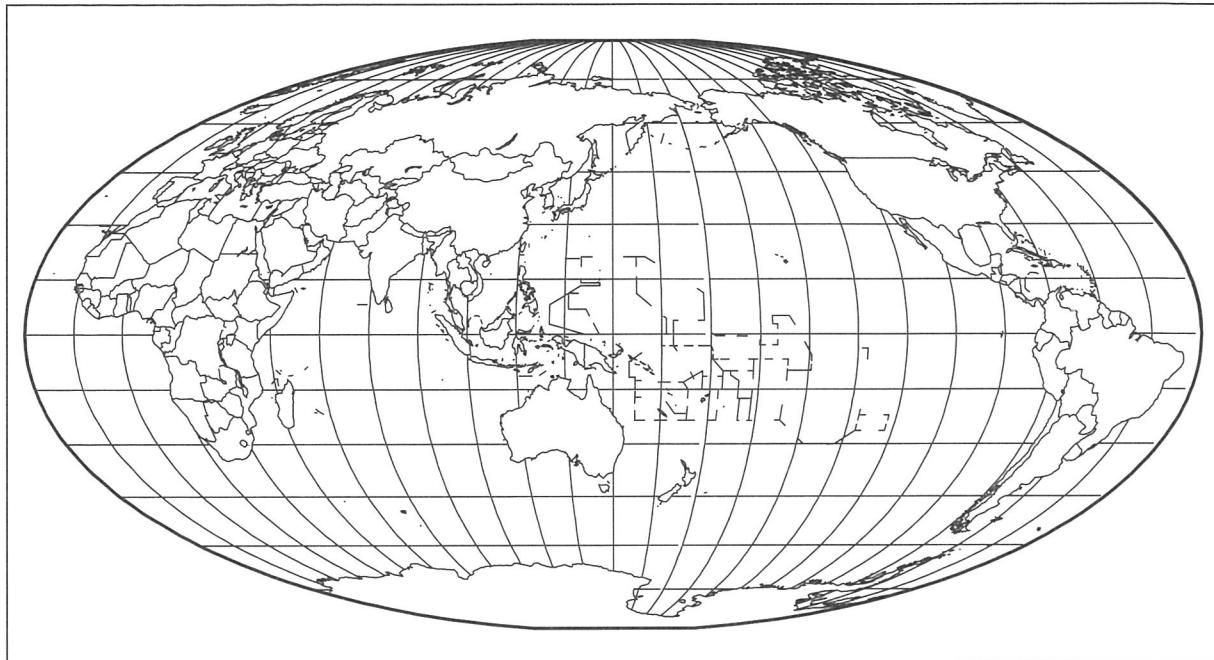
【資料1】



【資料2】



【資料3】

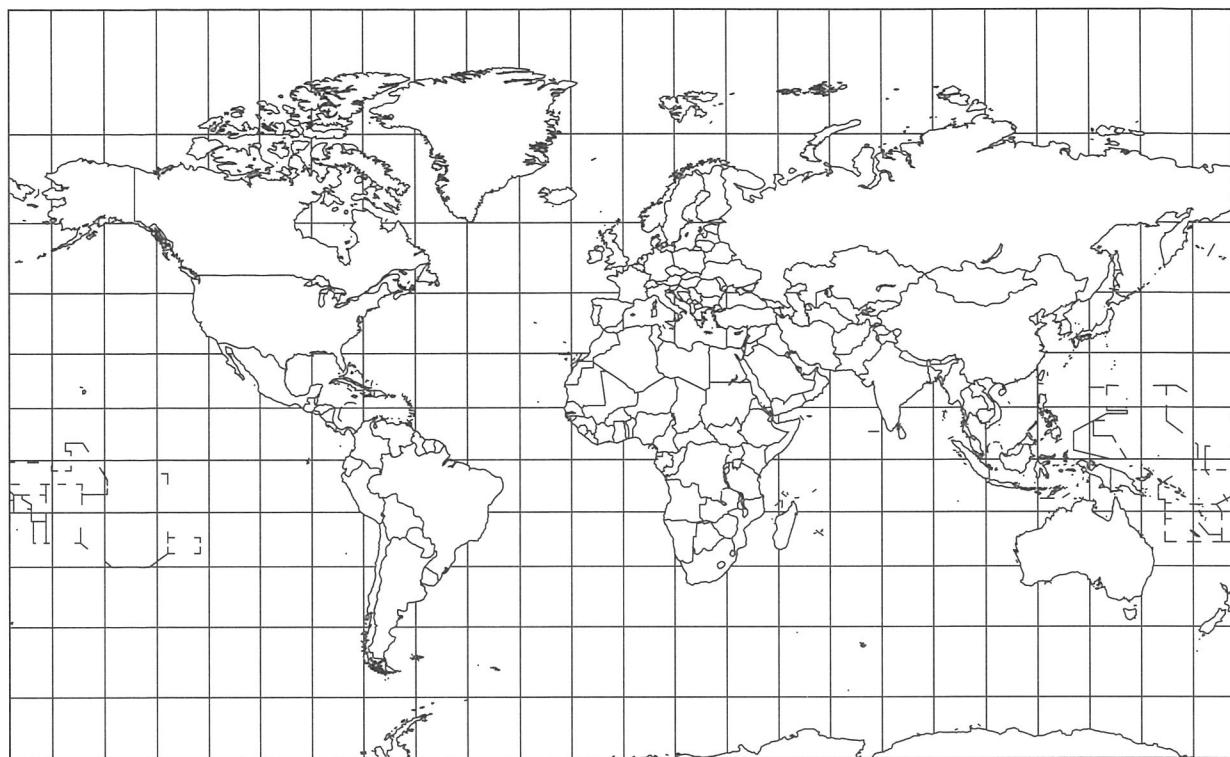


【資料4】日本とドイツの比較

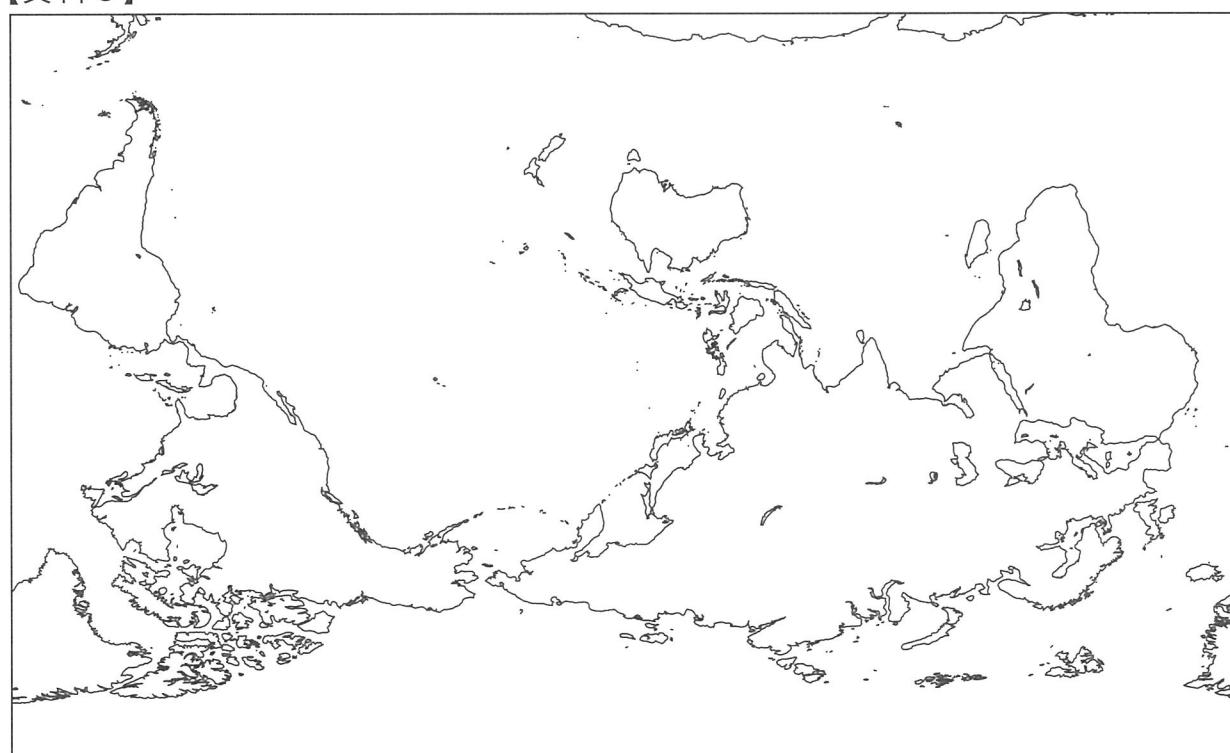
	日本	ドイツ
面積 (千 km <sup>2</sup> )	378	357
人口 (千人)	2018年	127185
人口予測 (千人)	2030年	121581
	2050年	108794
輸出額 (百万ドル)	644932	1340752
輸入額 (百万ドル)	606924	1060672
主要な輸出品 (輸出額に占める割合 : %)	機械類	35.0
	自動車	21.8
	精密機械	5.1
		26.5
		17.8
		4.0

(『世界国勢図会 (2018/2019)』をもとに作成)

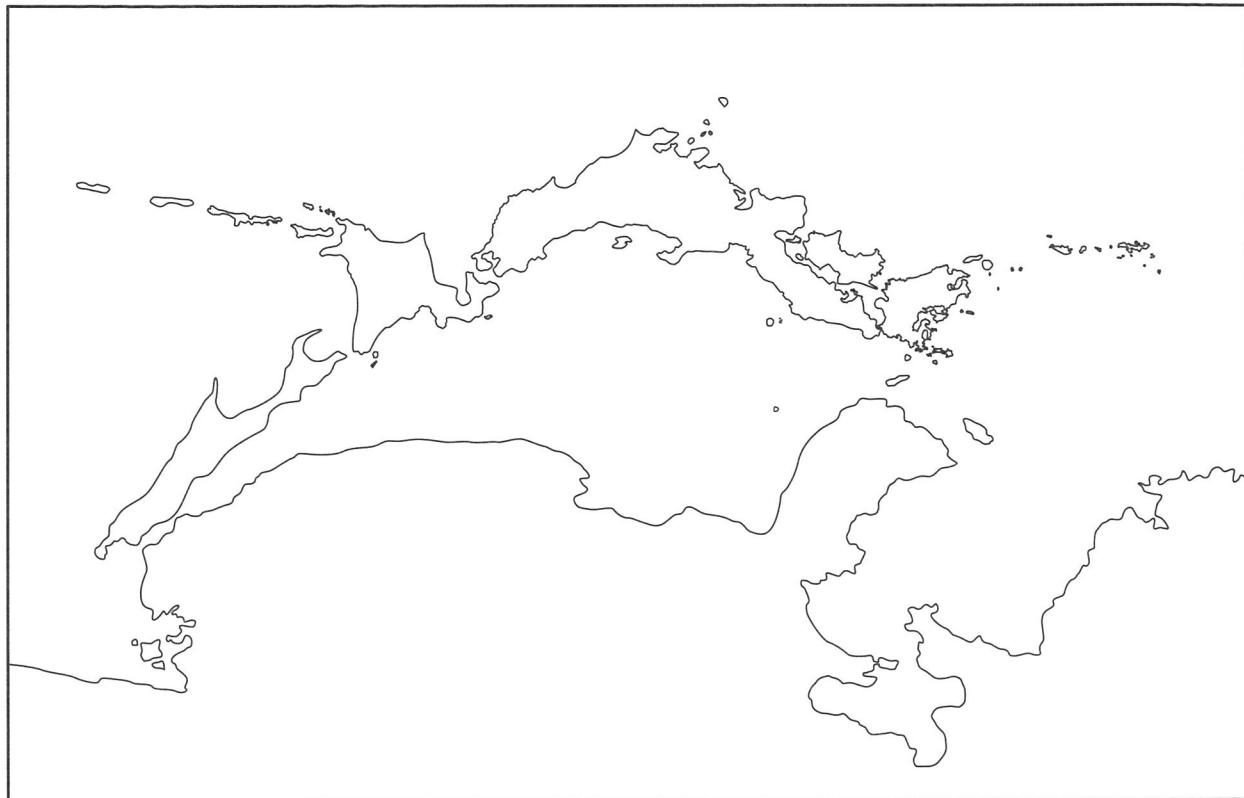
【資料5】



【資料6】



【資料7】



【資料8】



問題1 【会話文】中の（　あ　）にあてはまる国名として最も適切なものを【資料1】の地図のA～Dの中から一つ選び、記号を書きなさい。

問題2 （　い　）にあてはまる、【資料4】からわかることとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

- ア ドイツの方が日本よりも1kmあたりの人口が多い
- イ ドイツの自動車の輸出額は、日本の機械類の輸出額よりも大きい
- ウ ドイツも日本も機械類、自動車、精密機械の輸出額に占める割合を合計すると50%以上になる
- エ ドイツも日本も2050年に予測される人口は、2018年の人口よりも10%以上少ない

問題3 【会話文】中の（　う　）にあてはまるものとして最も適切なものを【資料1】の地図の□の1～6

から一つ選び、番号を書きなさい。

問題4 【会話文】中の（　え　）にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア 日本海

イ 太平洋

ウ 大西洋

エ インド洋

問題5 【会話文】中の（　お　）にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

- ア 北極を中心とした北半球の地図
- イ 北極を中心とした世界地図
- ウ 南極を中心とした南半球の地図
- エ 南極を中心とした世界地図

問題6 【資料9】は、みなみさんが図書館で見つけた本の一部分です。これまでのみなみさんとりかさんの【会話文】でみなみさんが気づいたことと、【資料9】で筆者が述べていることに共通する考え方を三十字以上四十字以内で書きなさい。ただし題名は書かずに行目、一番上から書くこと。

### 【資料9】

日本の書店で本を買うと、店員から「紙のカバーをおかけしますか」と必ず聞かれる。紙カバーをかけるだけではなく、ビニール袋<sup>ビニールぶくろ</sup>にも入れてくれる。

本に紙カバーをかけるのは、なぜだろう。電車の中で何の本を読んでいるかを他の乗客から見られないようにするためだろうか。それとも本の表紙がカバンの中で折れたり、食堂のテーブルの上で汚れたりするのを防ぐためだろうか。いずれにしてもドイツでは本に紙カバーをかけるサービスは存在<sup>そんざい</sup>しない。

ある時、東京のホテル滞在中にズボンのファスナーが壊<sup>こわ</sup>れたので、フロントに電話して「どこか近くに洋服の修理をしてくれる店はないでしょうか」と尋ねたら、従業員<sup>じゅぎょういん</sup>が部屋までズボンを引き取りに来て、その後無料で修理してくれた。とてもありがたかった。

九州のある旅館に泊まつたら、「夜中にお腹<sup>なか</sup>が空いたら自由にお召し上がりください」と廊下<sup>ろうか</sup>におにぎりが置いてあつた。どちらも、ドイツならば絶対にお金を取られるサービスだ。

2017年に沖縄県の小浜島に滞在した。この島にはバスなどの公共交通機関がない。小浜島のレストランや喫茶店<sup>きつさでん</sup>に電話をすると、泊まつてあるホテルまで車で迎<sup>むか</sup>えに来てくれるほか、食事が終わったらホテルまで車で送ってくれる。店の従業員にとつては大変な手間だと思うが、客にとつては安心して酒も飲めるので便利なサービスである。コーヒーを飲むだけ、ラーメン1杯<sup>いっぱい</sup>を食べるだけでも車で送迎してくれるのは有り難い<sup>あがた</sup>。日本でもあちこち旅行

しているが、このようなサービスを経験したのは初めてだった。

日本の太半のホテルでは浴衣、歯ブラシ、髭剃りが置いてある。荷物を少なくできるので便利だ。しかし、ドイツの大半のホテルではこういったアメニティーはない。宿泊料金が1泊100ユーロ（1万3000円）以下のホテルでは、ヘアドライヤーやスリッパもない。客が自分で持つて行かなくてはならないので、荷物がかさむ。

日本では、小包や郵便をめぐるストレスもドイツに比べるとはるかに少ない。<sup>※1</sup>宅配便の配達時間の指定はドイツよりもはるかに緻密である。<sup>※2</sup>

ある時、ドイツに日本で買った書籍や食料品などの小包を10個以上送ることになった。すると近くの郵便局の局員が夜9時ごろ家にまで小包を取りに来てくれた。もちろん、料金も家で払うことができた。消費者の利便性を考えた、日本ならではのきめ細かなサービスである。ドイツには、郵便局員が自宅まで小包を取りに来てくれるようなサービスはない。

ただ私は、玄関で大汗をかきながら荷物の重さを量つていて郵便局員の姿を見ながら、「この人は今日何時に自宅でくつろげるのだろうか。明日の朝には、何時にまた仕事に出なくてはならないのだろうか」と一瞬思ってしまった。コインに表面と裏面があるように、あらゆるものには光と影、長所と短所がある。私は毎年日本とドイツを行き来する間に、「日本のおもてなしは客にとつては素晴らしいことだが、サービスを提供する側にとつては、過重な負担になつてているのではないか」という思いも持つようになってきた。

（熊谷 徹『ドイツ人はなぜ、年290万円でも生活が「豊か」なのか』より。一部省略やふりがなをつけるなどの変更があります。）

〔注〕

※1  
※2

緻密 ユーロ  
ちみつ

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

お金の単位。  
きめ細やかであること。

問題7 りかさんは図書館で、【資料10】を見つけました。【資料10】で筆者が述べていることを、あとの「条件」にしたがってまとめなさい。

### 【条件】

○複数の段落をつくつて、三百字以上三百五十字以内で書くこと。

○題名は書かずに一行目、一マス下げたところから、原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。

### 【資料10】

学問領域にかかわらず、研究という営みは、たいていの場合、大きな問いと小さな問いに導かれています。個々の研究論文があつかうのは、的を絞った小さな問いですが、小さな問いの背後には、それらを生み出す母胎のような大きな問い合わせあります。

私の研究の母胎となる問いは、「生身の人間が、さまざまな、社会的、文化的、歴史的現実の中に生まれ落ち、世界と折り合いをつけながら生きて命を全うする——それがいかにして可能になつているのか、そこにはどういう課題（問題、困難、苦難）や支えがあり、それとどうつきあつたり、折りあつたり、乗り越えたり、生かしたりしていくことができるのか」というふうに表現できると思います。

私たちは、この世に生を受けてから死に至るまでのあいだ、じつに多くの人々とかかわりあいながら生きていくます。同じ時を生きる人々だけでなく、私たちが生まれる前に生きた人々や、死んだ後に生きる（であろう）人々の営みとも絡みながら、「いま、ここ」を生きているわけです。そうだとすると、私たちが「育つ」「育む」「学ぶ」「発達する」ということを理解するには、人が現実の生活の場（フィールド）で生きる過程をしつかり見据える必要がある、と私は考へているのです。

この母胎となる問い合わせから紡ぎだされた研究を、すべてここで網羅するというわけにはいきませんので、今回は、ことばを用いた人と人とのかかわり、「談話」に焦点をあててみたいと思います。私たちは毎日、いろんな活動の中で、ことばを通して他者とかかわりあっています。ここでは、談話を通してどんなことが見えてくるか、考えてみることにしましょう。

つぎのやりとりを見てください。

A 「神奈川県の県庁所在地はどこかわかる人、手を挙げてみて。

それでは、香織さんどうぞ」

香織 「はい、横浜です」

A 「そうですね」

さて、このやりとりを見て、あなたは、心の中に、どんな場面での、誰と誰とのあいだのやりとりが浮かびましたか。

おそらく、学校の教室での授業中（たぶん小学校の社会科の授業）、教師（A）が生徒たちに質問し、挙手をした生徒のひとりである香織さんが指名されて質問に答え、教師がそれを評価しているという場面を思い浮かべた人が多いのではないでしょう。

私はこれまで、大学での授業や講演で、同じ質問をしたことがありますが、ほぼ全員が、このような学校での授業場面を想像すると答えます。やりとりが起こった場面についての情報を何も提供していないにもかかわらず、みんな

が授業場面を思い浮かべるというのは不思議ではありませんか。談話をただけで特定の場面が想像されるのですから、私たちの日常を構成する活動場面には、それぞれ特有の談話のパターンがありそうですね。

実際、授業を録音・録画して、発話を文字化して分析<sup>※7</sup>した多くの研究が、このような談話のパターンを報告しております。またこのパターンは、日本だけでなく多くの国々の学校で広く使われていて、「質問（開始）—応答—評価の連鎖<sup>※8</sup>」と呼ばれています。

ところで、このパターンには、ある奇妙な特徴<sup>※9</sup>があるのですが、それが、何かわかりますか。あなたが、ふつう、誰かに質問するのはどんなときか、ちょっと考えてみてください。

そう。ふだん、私たちが誰かに何かを質問するのは、何かを知りたいけど、知らないときです。その場合、当然のことながら、なるべくそれを知つていそうな人にたずねるというのが真つ当な選択<sup>※10</sup>ということになりますね。ところが、授業でよく見られるこのやりとりでは、これがまったく逆<sup>さ</sup>になっているのです。授業では、質問者である教師はすでに「知つている」ことを質問します。しかも、質問を投げかけられる生徒たちは、質問者よりも知つている可能性の低い人たちです。

どうやら、授業は、それ以外の日常場面とは異なるやりとりの形式をもつた活動になっているようですね。それが、授業で学んだり教えたりすることとどんな関係があるのか、考えてみるとおもしろいですね。また、授業以外の場面で学んだり教わったりするときはどうか、比較してみると興味深いちがいが見えてくるかもしれません。

つぎに見ていくのは、ソビエトの発達心理学者ヴィゴツキーの発意にもとづき、ルリヤを中心として、一九三一年から三二年にかけて、ウズベキスタンで行われたフィールドワークの記録から引用してきた談話です。

論理推論過程についての調査の一環として、ウズベキスタンの人々に投げかけられた三段論法のひとつです。

三段論法  
さんだんろんぽう

雪の降る極北では熊はすべて白い。

ノーバヤ・ゼムリヤーは極北にあってそこにはいつも雪がある。

そここの熊は何色をしているか？

この問い合わせられたら、あなたはどう答えますか。これも、大学の授業で学生にたずねると、ほぼ全員が、即座にひとつの答えを返してきます。それは、「白い」という返答です。みんなの多くがやはり「白い」と答えたのではないでしょう。そうですね、それが「正解」です。

以下は、調査者が、ウズベキスタン、カシュガル村のアブドウフライムさん（三七歳）<sup>さい</sup>に、この問い合わせかけた際のやりとりの記録です（A：アブドウフライム）。

A いろいろな獣がいる。

（三段論法  
がくりかえされる）

A わからないな。黒い熊なら見たことがあるが、ほかのは見たことがないし……。

それぞれの土地にはそれぞれの動物がいるよ。白い土地であれば白い動物、黄色い土地には黄色い動物が。

調査者 ところで、ノーバヤ・ゼムリヤーにはどんな熊がいますか？

A われわれは見たことだけを話す。見たこともないものについてはしゃべらないのだ。

調査者 さつきの話からはどうなりますか？

(三段論法（がくりかえされる

どういうことなんだろう。われわれのツアーレイは君たちのツアーレイとは似ていなし、君たちのツアーレイはわれわれのツアーレイとは似ていなし。君の話に答えられるのは、見たことのある者だけだね。見たことのない者は、君の話を聞いても何も言うことはできないよ。

調査者 いつも雪のある北方では熊は白いと私は言いましたが、そこからノーバヤ・ゼムリヤーの熊はどのようだと結論づけられますか？

A 六〇歳とか八〇歳の人で、その人が白熊を見たことがあつてしまふなら信用してもよいだらうが、私は白熊を見たことがないんだよ。だから話すことはできないんだ。私の言うことはそこににつきる。

見たことのある者は話せるが、見たことのない者は何も話すことはできないんだよ！

(ルリヤ『認識の史的発達』一五七ページより)

どうですか。おそらく、想像していなかつたようなやりとりが展開てんかいしていったのではないでしようか。

調査者は、なんとか答えてもらおうと、このやりとりのあいだに二回も三段論法の問い合わせをくりかえし、手を変え、品を変え、アブドウフラムさんは三段論法への答えを引き出そうとしています。しかし、彼は、とうとう最後まで「白い」とは答えませんでした。

この談話を見ていて、アブドウフラムさんは「機嫌きげんが悪くてわざ」とはぐらかしているのでは」とか、「ふざけて

いるのでは」と感じた人は少なくないと思います。

でも、もう一度、よく見てみましょう。アブドウフラムさんは、行き当たりばったりで「誤った」答えを返しているのであります。彼は、終始貫して、「見たことのないもの、知らないものについて、語ることはできない」と主張しています。じつは、当時、ウズベキスタンの人たちの中には彼と同じような考え方をした人が多かったのだそうです。

「アブドウフラムさん（たち）はなぜ答えられないのだろう」と問うかわりに、「私たちは、なぜ、すぐに「白い」と答えてしまうのだろう」と問うてみたらどうでしょう。極北に行ってみたこともなければ、ノーバヤ・ゼムリヤーなどという地名を聞いたこともない。それにもかかわらず、平気で「白い」と言ってしまう。これって、どういうことでしょう。

三段論法では、具体的な経験があるかないかにかかわらず、設定された命題の関係から、論理的に推論して結論を導き出すことになります。これは、人類がつくり出したひじょうに強力な思考の道具のひとつです。三段論法的思考を駆使して、まだ誰も経験したことのないことについても推論にもどづく結論を出し、それにしたがって行動するということで、人類は未知の領域での活動範囲を広げてきました。確かに、それによつて、さまざま恩恵を受けてきたことは否定できませんね。

しかし、そこから生まれてきたものは、いいことばかりだったでしょうか。

こう考えると、調査者がくりかえし投げかける三段論法の問い合わせて、「見たことのないことは、しゃべらない」と、答えることをかたくなに拒みつけたアブドウフラムさんの発話が、最初の印象とはちがつたものに見えてきましたか。当時、ウズベキスタンの人々のあいだには、見たことも聞いたこともない、知らないことについて、あれこれと推測でものを言う（判断する）ことを戒め、その危険性をわきまえる知恵と価値観が、しつかり根づいていたの

ではないでしょうか。見たこともないことについて、いとも簡単に推論してものを言うようになつてゐる私たちは、アブドウフラムさんたちから学ぶべきことがないでしょうか。

自分には理解に苦しむようなやりとりに出会ったとき、人は、往々にして、相手を過小評価したり、拒否したり、否定したりしがちです。でも、やりとりを通して相手の発言の一貫性にしつかり目を向けると、それを支えている意味や、価値観、世界観に触れることができるかもしれません。そうすると、やりとりで生じる食いちがいは、立ち止まり、わが身を振りかえるきっかけになり得るし、学びへの扉をひらいてくれる可能性をも秘めているのです。

## 『中略』

私たちが、日々の生活を送る中で体験する、さまざま活動場面には、それぞれ歴史的に培われてきた特徴的な談話パターンがあります。私たちは、このような談話の特徴をからずしも意識的に生み出しているわけではありません。いつのまにか身につけた談話パターンを「当然」または「自然」なやりとりの形として使っていくことは多いでしょう。

人と人とのやりとりをフィールドワークする役割のひとつは、知らず知らずのうちに使われている、このようなパターンを浮き彫りにすることです。談話のパターンは、私たちがそれを用いることで、維持されていきます。それで問題のないこともありますが、立ち止まって考え直したほうがいいことも少なくないかもしれません。

活動を形づくる談話パターンは、からずしも固定的なものではありません。大切なのは、やりとりの担い手である私たちが、そのあり方を見つめ、対話し、必要に応じて、談話パターンのレパートリーを広げたり、新たな談話の形をつくつていったり、すでにあるパターンの魅力に気づいたりしていくことだと思います。

私は、日本とアメリカのいくつかの大学で授業をしてきましたが、その際、これまでの、やりとりに関するフレームワークの経験をもとに、学生たちといっしょに、大学ではめずらしい談話パターンで構成される授業を試みてきました。大学では、各研究室のゼミを除くと、先生が講義をして学生がそれを聞くという形式の授業が多いようです。中学校や高校もそうかもしれませんね。

私はまず、学生たちに、授業で暗黙の前提となつてゐる講義中心の知識伝達型の談話パターンに気づいてもらいました。そして、そのかわりに、学生どうしが、たがいに安心して考え方述べあい、問い合わせを投げかけあつたり、テーマへの理解を深めあつたり、議論<sup>ぎろん</sup>したりするようなやりとりがふんだんに織りこまれた授業をつくつてみたのです。すると、不思議なことに、学生のあいだにたがいの学びを支えあうような関係が生まれ、授業が単に教師から知識を受け取るだけの場ではなくなりました。授業が終わつた後にも、受講生が集まつて、たがいの学びを支えあうサポートグループをつくつた大学もありました。

どんな談話のパターンも、万能ではありません。それぞれのパターンが、何を可能にして何を不可能にしているのか、何を大切にして何をおろそかにしているのかを考えてみることが大切です。また、意図していなくても、やりとりを通して誰かをいつのまにか軽んじたり、<sup>だれ</sup><sup>15</sup>虐待<sup>なぐいだ</sup>たりしてしまつていなか、立ち止まつて見つめてみることも必要ですね。

人間という種は、ひとりでは生きていいくことが不可能なようにできています。だからこそ、他者とのやりとりは誰にとつても大きな意味をもつのでしょう。さまざま場面でのやりとりのあり方を見つめ、それについて語りあい、必要ならば談話の形をつくっていくという役割<sup>やくわり</sup>は、私たちひとりひとりが担つてゐるわけです。私にとって、人と人とのかかわりをフィールドワークすることの魅力<sup>みりょく</sup>は、たがいに育みあい、支えあって生きていく可能性をなるだけ豊かに広げるようなやりとりのあり方を、考えさせてくれることにあるのだと思ひます。

(當眞 千賀子『談話と文化的学びのかかわりを見つける』より。一部省略やふりがなをつけるなどの変更があります。)

## 「注」

- ※3 母胎 ぼたい … … … … もののことが生まれる、もとになるもの。
- ※4 折り合い … … … … おたがいにゆずり合って、解決すること。
- ※5 網羅 もうら … … … … 関係するものを、のこらず集めること。
- ※6 談話 … … … … 話。会話。
- ※7 発話 … … … … ことばにして口に出すこと。発言。
- ※8 発意 … … … … 自分で考えを出すこと。
- ※9 フィールドワーク … 実際に現地へ行つて調査や研究を行うこと。
- ※10 三段論法 さんだんろんぽう … … … … すでにわかっている二つのことから、三つ目の新しい判断を導く方法。
- ※11 極北 … … … … 地球上で最も北にある地域。
- ※12 命題 … … … … あることがらについて「これはこうである」などとことばで表したもの。
- ※13 駆使 くし … … … … 使いこなすこと。
- ※14 戒める いまし … … … … 用心する。注意する。
- ※15 虐げる しいた … … … … ひどいあつかいをして苦しめる。